

い人々のもとに私的な教育支援が行き渡っている状況を目の当たりにし、人々に選択の自由がある状況の重要性を改めて認識しました。

すなわち、それぞれの集団帰属がどのようなものであっても、経済的状况に余裕がなくとも、無償で義務教育を受けたいと思った時に、全員に学校の門戸が開かれている状況を生み出す必要があります。

こうしたことから、これまで虐げられてきた歴史をもつダリトの人々に着目し、いかに彼らの生活と教育の機会が程遠かったのかをひもとき、どのような教育の経験によって彼らの置かれた状況が改善されていくのか、という過程をこれからの研究で詳細に明らかにしていきたいと思います。

ウガンダで IT がつくるバイクタクシーの安心

大谷 琢磨*

ウガンダで感じた夜間移動の不安と不便さ

2015年9月の夜10時すぎ、わたしは、ウガンダの首都カンパラにある中華レストランで、先輩の研究者たちと食事を終え、帰路につこうとしていた。レストランを一步出ると辺りは暗く、車の通行がない。見当てるのは、50mほど離れた交差点で客待ちをしている3台ほどのバイクタクシーだけだった。当時、わたしはカンパラに知り合いがおらず、彼らを移動手段として使う以外に方法はなかった。しかし、相手は得体の知れない運転手であり、バイクタクシー運転手による強盗や連れ去りのうわさを聞いたこともあり、安心はできなかった。運転手を不快にさせないよう、運賃交渉はせず、言いなりのまま、

わたしはバイクにまたがった。バイクタクシーに乗っているあいだ、運転手の名前や住所などといった情報を聞き出し、何かあった場合には、その情報を警察に届け出ようという心づもりだった。無事に滞在先に帰着したあとも、先輩たちとショートメールでお互いに無事を確認しあった。2015年当時、見ず知らずのバイクタクシー運転手に身をゆだねるのは、かなりの緊張感をともなった。

人々に親しまれた交通手段—ボダボダ

バイクタクシーとは、自動二輪車を利用した交通機関である(写真1)。ウガンダではバスや鉄道といった公共交通機関が未整備で、人々が気軽に利用できるのは、乗り合い

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 ボダボダ。客を乗せるバイクタクシー

タクシーかバイクタクシーしかない。乗り合いタクシーは都市部の幹線道路で操業しているが、渋滞の影響を受けやすい。それに対して、バイクタクシーは大通りから外れた場所や農村にも移動でき、車のあいだをすり抜けて渋滞のなかを移動することもできる。また、ウガンダでは雇用が不足しており、バイクタクシーは、高度なスキルをもたない若者たちの重要な現金獲得源になっている。このように、ウガンダにおいてバイクタクシーは、需要と供給の両方が高く、ウガンダ全土に普及している。現地では、*boda boda*（以下、バイクタクシーはボダボダと記載）と呼ばれて親しまれている。

ボダボダに関する否定的な側面

ボダボダは需要と供給の高さからウガンダで急増しているが、人々からは、ネガティブな意見も聞こえてくる。たとえば、ウガンダの警察官が「ボダボダ運転手は窃盗をはたらく」、「犯罪者の隠れ蓑になっている」という反社会的な存在だと語るのを聞いたことがある。また、ボダボダ運転手をおもな客として

いるチャパティ屋の主人は、ボダボダは「命を顧みない荒い運転をし、人をひき殺す」と語った。2018年にわたしの調査地であるマサカの街なかで、車道を渡っていると、後ろから来たボダボダのハンドルに左腕を当てられ、持っていた砂糖を道にぶちまけてしまったことがある。そのとき、わたしは、考え事をしていてボダボダに気付かなかったのだが、わたしにぶつかったボダボダの運転手は後ろを振りむくこともなく、走り去った。また、ボダボダに乗って渋滞のなかを走行していたときには、車と車の非常に狭いあいだをすり抜けて走行していたため、わたしの膝が車に当たることもあった（写真2）。このほかにも、運転手が相場よりも高い運賃を吹っかけてきたり、初めに目的地への行き方を知っているとっておきながら、実際には目的地までの道を知らなかったりすることもあり、ボダボダ運転手とのトラブルは日常茶飯事だった。そのため、大声をあげて運転手と



写真2 交通渋滞をすり抜けるボダボダ

口論することも幾度となくあった。だからこそ、このようなトラブルが起こるリスクを軽減させるために、わたしは、信頼できる運転手を見つけようと努力してきた。一度利用して、値段交渉や運転の丁寧さ、支払いどきの対応から、大丈夫だと判断した運転手には、それ以後にも繰り返し利用するなどして、信頼できる運転手をひとりでも多く確保しようと努めた。信頼できると判断した運転手には、遠方への移動や、夜間の移動どきを送迎をお願いした。ボダボダの利用でトラブルを避けるためには、細心の注意が必要であり、ときに不便さがともなった。

新たな IT サービスの登場

2016年に再びウガンダを訪れると、このようなボダボダ利用の不便さに、劇的な変化がみられた。スマートフォンでボダボダを呼ぶアプリが登場したのである。これは、「SafeBoda」というライドシェアのアプリで、同名の企業により提供されている。ライドシェアとは、自動車の運転者と、移動手段として自動車に乗りたい利用者とを結びつけるサービスの総称である。欧米や日本においても、「Uber」はライドシェアを提供する企業として有名である。Uberは基本的に自動車のライドシェアを提供しているが、SafeBodaは、バイクタクシーのライドシェアを提供している。

わたしがこのアプリを初めて利用したのは、2016年7月カンパラで、友人と韓国料理屋に行ったときのことだった。そのときは22時すぎに店を出て、試しにこのアプリを

スマートフォンで利用した。自分の名前や電話番号などをアプリに登録し、アプリ上の地図で乗車地点と降車地点を入力すれば、GPSで周辺にいる運転手とマッチングして呼ぶことができる（写真3）。使い方がとても簡単で、まずこのことに驚いた。そして、実際にボダボダが迎えに来ると、さらに衝撃を覚えた。到着した運転手が、SafeBodaのシンボルカラーである蛍光オレンジのジャケットとヘルメットを着用し、乗客用のヘルメットまで持っていたのである（写真4）。通常、ボダボダ運転手は警察の前でのみヘルメットをかぶり、運転手から乗客がヘルメットの着用を求められることもない。そのため、安全のためにマイ・ヘルメットを持ち歩く外国人もおり、わたしも日本からわざわざヘルメットを持っていった。

運転手が着用しているジャケットとヘルメットには、運転手の名前とともに、SafeBoda

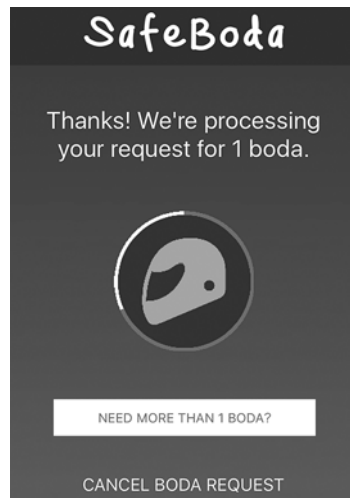


写真3 SafeBoda アプリによる運転手の呼び出し画面



写真4 オレンジ色のジャケットを着る SafeBoda 運転手。客用のヘルメットが準備されている

から与えられた ID ナンバーが記入されていた。運転手たちは SafeBoda に National ID (国民カード) などの個人情報を登録しており、何か問題が発生しても、ジャケットに記入された番号や名前を会社に伝えれば、クレームを入れることができる。たとえ初対面であっても、個人情報が管理されているので、SafeBoda の運転手を特定し、その所在を追跡することは可能である。ほんの 1 年ほどのあいだで、見ず知らずのボダボダ運転手に身をゆだねるときにもっていた不安を抱かずに済むようになった。目的地に到着すると、運転手のスマートフォンに運賃が表示され、その金額を支払うだけで清算が完了した。また、支払いは現金だけでなく、事前に登録したクレジットカードやモバイルマネー

の利用も可能だった。

乗客は支払いを終えたあと、アプリで運転手を 5 段階で評価することができる。アプリ上で、運転手を利用する前に評価が可視化され、乗客はその評価を把握できるようになった。このように、SafeBoda は、ボダボダを利用すると避けられない値段交渉の煩わしさも、ヘルメットをかぶらずにバイクに乗る不安も、そして、知らない運転手の素行に対する恐れも、すべて解消してくれたのである。スマートフォンと SafeBoda というアプリ、そしてこの IT に連携するボダボダ運転手が、乗客の安全と安心を提供するようになったのである。カンパラの街なかを走るボダボダに乗りながら、これこそ IT が社会変革をうながすイノベーションではないかと思ひ、うれしさから、移動中に運転手に対していろいろと尋ねた。

SafeBoda で広がった行動範囲

これ以後、わたしの行動範囲は広がり、より自由にカンパラを動き回るようになった。とくにわたしがカンパラにいるときの夕食のバラエティーは劇的に広がった。SafeBoda が登場する前には、ホテル近くの屋台で売られているチャパティやミルクチャイで簡単に済ませていたが、中華料理やケバブ、ピザなどを食べに出かけるようになった。

このように SafeBoda は、利用客の行動範囲に大きな変化をもたらした可能性がある。といっても、現時点では、このアプリを主に利用しているのは富裕層や外国人である。とくに、自家用車を持たない外国人にとって、

信頼できるボダボダ運転手を確保することは、移動の自由度を高めるうえで重要である。

そして、2017年9月にふたたびウガンダに渡航したとき、SafeBoda以外に、カンパラには新たに2社が進出しており、合計3社によってボダボダのライドシェアをめぐる競争が激しくなっていた。カンパラの幹線道路では、ライドシェア企業のジャケットを着た運転手が何人も走っている。しかし、現状はまだ、カンパラ市内であっても、時間帯や場所によっては、アプリで周辺を探してもボダボダが見つからないこともあり、このサービスは発展途上だといえる。

今、ウガンダにおけるスマートフォンの普及率は20%ほどであり、日本やアメリカの約70%と比べると大きく下回っている。しかし、近い将来、ウガンダにおけるスマートフォン普及率はさらに上昇するだろうと推測される。そうなれば、多くの人が、スマートフォンのアプリを利用してボダボダを呼ぶようになるだろう。このとき、人やモノの流動性はさらに高くなり、ボダボダ間のサービスや価格の競争も激化する可能性がある。スマートフォンやITがどんな未来をつくっていくのだろうか、カンパラの雑踏のなかで、さまざまな想像がふくらんでいく。

介助現場のフィールドワークからみる 脳性麻痺児を対象とした排泄介助の工夫

善 積 実 希*

「排泄」の語りにくさ

わたしたちが生活をしていくうえで、排尿や排便といった排泄行為は身体の健康のパロメータである。しかしながら、日常生活では「排泄」という言葉を口にすることすら少なく、その語りにくさがあるようにもおもわれる。介助の現場では排泄という言葉を用いることや、排泄について考えることは、日常的であり、介助を受ける人の健康について考

えるうえでとても重要なことである。たとえば、障害児の自立を考えたとき、排泄に関していえば排泄自立がある。彼らにとって排泄自立は、彼らが排泄できるようになるだけでなく、大きな自信をもって自由に行動することを可能にし、発達の可能性を引き出すといわれており [桑野 1988: 107]、排泄について考えることが欠かせない。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科